

『ゴルフとは、自らを自らで励ますこと。』



バリューゴルフ
VALUE GOLF
www.valuegolf.co.jp

日本オープン、岩崎優勝

国内男子ツアーでも、コースセッティングの難易度の高さが、一番とも二番とも思われるのが日本オープンゴルフ選手権。日本において、メジャーといわれる男子の大会は、この「日本オープンゴルフ選手権」、そして、「日本プロゴルフ選手権」、「日本シリーズ」、「日本ゴルフツアー選手権」といわれている。中でも日本オープンゴルフ選手権は、選手としての能力の全てを要求されるといっても過言ではない。ゴルフに必要な技術、4日間を通して戦い抜くための体力、さらには、過酷な自然と戦うための精神力、自らを鼓舞するためのメンタルなど、どれも欠けてもこのトーナメントで勝ち切ることはできない。

一方で、なぜかこの日本オープンでは、時として予想だにしないプレーヤーが勝利を呼ぶことがある。昨年、日本オープンを制した蛸川泰果。まだ、日本福祉大学の4年生でもある学生が、何年ものキャリアを持つプロフェッショナルなゴルファーたちを圧倒した。若いだけに、プレッシャーを感じないうちに能力を発揮して勝利したともいえるが、それだけで勝てるほど日本オープンは甘いものではない。

1927年に創設されたこの大会は、そろそろ100年目を迎えようとしている。日本のゴルフの歴史をつくったともいわれる赤星六郎や宮本留吉からはじまり、海外勢では、セベ・バレステロスが優勝したこともある。もちろん、青木功、中嶋常幸、尾崎将司も名を連ね、最近では松山英樹など、錚々たる優勝者が顔を並べている。

今年、このトーナメントを制したのは、無名といってもいいほど、誰も知らなかった岩崎亜久竜である。初めてツアーに参戦したのは昨年。今年の開幕戦からたびたび活躍していたが、181cmの長身を生かした飛距離と、攻撃的なゴルフは、徐々にゴルフファンの心を掴んだ。

3打差の7位タイから出て、単独首位で戻ってきた18番。優勝は目の前である。ところが、右の林に大きく曲げたティーショットで、大トラブル。幸いにテレビ塔の障害物による救済を受け、ラフとはいえボールが浮いている状況からグリーンを狙ったが、その度胸と技術力は圧巻だった。グリーンに向けて、真っ直ぐピンが狙えないショットだったが、左側の池の上から大きなスライスをかけて、ツーンンに成功し、事なきを得た。彼には、華があるように思う。一つ後ろには人気者の石川遼が大ギャラリィを引き連れて、1打差に迫っていたのだ。

「風に乗せて20ヤードまでのつもりで池の上から(曲がる)フェードで打った」。思い通りに弧を描いたボールに彼の技術力の高さと精神の強さ、驚くほどの集中力を感じたのは、私だけではないだろう。



戸張 捷 Sho Tobaru

1945年、東京生まれ。高校からゴルフを始め、3年で全日本ジュニア3位、大学4年で日本アマ9位。住友ゴム工業(現SRIスポーツ)に入社後、株式会社ダンロップスポーツエンタープライズへ出向。トーナメントディレクター、プロデューサーとして日本ゴルフ界に貢献した。現在は、ゴルフキャスターとして活躍するほか、ゴルフトーナメントやイベントのプロデューサー、コンサルティングなども手掛けている。